

## 会長の挨拶 15 職業の本質と職業分類 ―その2―

中世社会においては、封建制度がその根底に存在していたから、人々は最高の封建領主と縦の系列において支配・服従の関係に立ち、従って社会の構造は一人の封建領主―その最高のものが皇帝である―を頂点としてピラミッド状に底辺の広大な状態を呈しており、その最底辺に膨大な数に及ぶところの人間の形をした非人間―すなわち、物と人との中間形態たる奴隷が存在した。そこでは、人間と人間との関係は単純に平等ということができず、平等は同位の階層の人間の間には存在しなかったのである。すなわち、封建領主は封建領主、自由人は自由人、奴隷は奴隷相互間においてのみ平等であったにすぎなかったのである。ここに国民全体が人として平等の地位においておかれた近代社会の著しい特質をみるのである。もっとも、これはあくまで事態を法的乃至制度論的に見てのことではあるが。

ただ、この縦の系列の人間の身分的位置づけの他に、横の分類もまた存在した。中世人は、社会を構成する国民の階層を奴隷を除外して機能的に三つに分けた。一つは戦う階級、今ひとつは祈る階級、そして最後に働く階級、がこれであった。武士・僧侶・農民がこれであって、封建制度初期においては、社会の生産手段が幼稚であり、人々は、土地に直結する農耕とそれに付帯する生活必需品の自給自足的体制―通常荘園制度と呼ばれている―の枠組みの中で位置付けられていたので、職種も上の三種で一応事足りたのである。

近代的な資本の体制が当初目に見えぬくらいの緩慢さを以て出現するに到ったのは、それら荘園内部の生産技術の練達から、物資の生産が超過となり、かくして余剰物資を交換することによって、人々がより充実した生活を営もうとしたことをもって始まる。この物々交換の中から、封建性社会の異分子たる商人階級が生まれ、また特殊職人技術生産の必要から職人階級が生まれ出るに到ったのである。我が国のいわゆる士農工商の分類も、西洋的な類型とほぼ同一であることを知るの面白い。

続きは次回にします。

(小堀憲助著『ロータリー思想の理論構造』より引用)